

## 第1章 M.コーンにおける養育価値志向の理論モデル

### 第1節 社会階層<sup>(1)</sup>と養育との関連

#### 1) 戦前の諸先行研究

コーン理論を下敷きとする養育の価値観の考察において触れておかなければならないのが、階層と養育との関連についての先行諸研究である。養育と階層との関連については、主に中間層 (middle class) と労働者階級もしくは下層 (working class/ lower class) などの区分によってそれぞれの傾向が推察され、その差異が議論されてきた。

この問題について初めて触れられたのが、R.リンダの『MIDDLE TOWN』(1929)においてである。Lyndは子どものしつけに関する習慣とその階層差について、15の調査項目から母親たちの育児に対する姿勢を分析しており、労働者階級の母親と異なり中産階級 (business class) の母親は「教会への忠誠」よりも「自立 (independence)」、また「素直さ」などを重んじる傾向があることを記述している<sup>(2)</sup>。

しかし、戦前のアメリカ社会において、もっとも詳細に育児と階層との関係について分析を試みたのがD. ハヴィガスト(1946)らであった<sup>(3)</sup>。ハヴィガストは授乳ならびに排泄訓練における諸側面、生活面での厳格さ、進学や職業に関する期待、自己責任・管理の程度などと階層差についての統計的な調査を行った。その結果、労働者階級よりもミドルクラスにおいて授乳時間の規則や離乳時期の早さ、排泄訓練の開始がはやい、つまりそれら育児技法における厳格な傾向がみられるという。また生活面においても昼寝の習慣や外出に関する厳しさが指摘されている。しかしその一方で家の手伝い、自己管理、進学や職業に関する高い期待がミドルクラスの子どもには背負わされており、相対的に自己責任ならびに自己業績達成に対する強い傾向がみられるとしている<sup>(4)</sup>。さらに、映画館などではなく「建設的な」活動(博物館/習い事)のためにダウンタウンに行くことは期待されているので、ある種必要な「野心」を育成することが望まれていると解釈している<sup>(5)</sup>。つまり、ミドルクラスの親は労働者階級よりも授乳や排泄訓練の作法に関してより厳格である一方、自己責任を早い年齢段階で担えるようにも期待されているというのである。

また同じく戦前(1928 - 1932)における3歳児以下の母親サンプルの行動観察を分析したB. スチャファア(1960)<sup>(6)</sup>においては、ミドルクラスの母親が子どもに対して「自律性 (autonomy)」、「協調性」、「平等性」の態度を有する傾向のあることを指摘している<sup>(7)</sup>。こ

ここでいう「自律性」とはちょうど「統制 (control)」の反対側のベクトルに位置する指標とされており、これに関する限り、ハヴィガストラのいう自己責任・自己管理などの意味合いと重なり合う部分が多いとおもわれる。

## 2) 戦後の諸先行研究

戦前・戦後をはさんでこのような階層差と養育実践の傾向に関する問題のひとつとして一般的にかかげられていたのが、子どもに対する親の態度が寛容 (permissive) であるか厳格 (severity) もしくは罰則的 (punitive) であるかといった傾向に言及することであった<sup>(8)</sup>。これに関する代表的な見解とされる、およそ 1930 年から 1955 年にわたる階層と養育実践に関する文献を整理した U. ブロンフェンブレナー (1966) は、その過去 25 年余りの間に育児の技法において変化があったと指摘する<sup>(9)</sup>。彼によれば、大戦以前の初期においてはミドルクラスの母親は授乳や離乳、排泄訓練に関し下層の母親よりも早く行う傾向があったが、過去十年間でこの傾向が逆になったという。では下層におけるこれらの技法の傾向が厳しくなったのかといえばそうではなく、この 25 年間でアメリカの母親は授乳や食事、排泄訓練の課程が全体としてより遅くなった、つまり寛容的な傾向が見られるようになったというのである<sup>(10)</sup>。他にも慣用的になった具体的な項目としては、「指しゃぶり癖」、「排泄失敗」、「攻撃性」などがあるが、これらも一貫してミドルクラスの母親により寛容的な態度が見られるようになったとしている<sup>(11)</sup>。

しかし一方、自立ならびに達成 (achievement) に関する子どもの訓練についての傾向はどうであろうか。ブロンフェンブレナーによれば、これに関する過去の文献は「自立の訓練」

「子どもの自己管理ならびに自己責任を請け負うことにおける進歩」「子どもの学問的進歩に対する野心」の項目に当たる 3 つの質問の型に整理することができるが、まず における「子どもの依存心の表現」に関する限り、戦後のミドルクラスの母親は下層の母親よりもより寛容的であるとする調査があるという(戦前の調査は見あたらない)。また についてははっきりした傾向はみられないとしながらも、ミドルクラスの母親があまりにはやく子どもに強制しはすまいかと、依存ならびにやる気の兆候に敏感になっているのかも知れないとしている。 については戦前・戦後の調査一貫して、ミドルクラスの母親が下層の母親よりも高い業績(進学)期待をかけていることが指摘されている<sup>(12)</sup>。つまりこれらの項目に関する限り、ミドルクラスの母親には子どものその依存度・欲求表現や行動に寛容さが現れつつも、学校での業績や学歴取得に対する高い期待が保たれてきたことが示されている。このこ

とは子どもの自立的な価値に対する志向が失われる傾向を意味するわけではなく、むしろ子どもの将来的な未来が見据えられていると考えられる。

こうしたミドルクラスの、一見寛容的にみえる子どもに何らかの強い期待がかけられているとおもわれる傾向は、例えば当時のアメリカにおける育児書内容の傾向にも一致しているたようである。育児書の動向に着目した首藤（1998）によれば、子どもの主体性や個性を重んじた専門家の科学的研究の成果が盛り込まれたマニュアルおよび育児書、つまり寛容的方法における育児実践とは、「母性礼賛と自己犠牲」を不可欠とするような以前とは異なったより高度に精密化されたプログラムをもっているという<sup>(13)</sup>。寛容的育児というのは、子どもにとって寛容に見えるだけであって、母親（養育者）にとってはまさにその逆のものとなるというのである。したがってその表向きの寛容さとは、まさに子どもへの期待の高さを示しているともいえる<sup>(14)</sup>。

さて、このようなミドルクラスの変動に対する背景的な要因としてブロンフェンブレナーが挙げているのは、ミドルクラスと下層の母親を取り巻く文化的環境の機能の異なりというものである。つまりミドルクラスの母親は下層の母親よりも一貫して養育に関する時代の情報にさらされやすく、雑誌、本、ラジオの情報や専門化などの意見をよく聞き、またそれらを理解し実践できる教養を持っているという。そして、社会化実践の代理人の見識に伴って、ミドルクラスの親の養育方法が変更されてきたと言うのである<sup>(15)</sup>。だがこのことは逆に、情報とそれを理解するある程度の教養さえあれば下層者の母親といえどもミドルクラスの母親と同様の養育方法になることを意味する<sup>(16)</sup>。事実、下層間における文的格差が狭まってきている要素の実例として、ブロンフェンブレナーは下層におけるスポックの育児書の流通を挙げている<sup>(17)</sup>。

同じように、階層間の文化的背景の異なりを養育方法の異なりの要因に当てはめていく考え方はデュバル（1946）である<sup>(18)</sup>。

デュバルは、親という役割概念（conceptions of parenthood）を伝統的なもの（traditional）と非伝統的なもの（nontraditional）とに区分した場合<sup>(19)</sup>において、上層クラスではこの非伝統的な概念、つまり特定の行動における服従ではなく成長ならびに発展への期待によって特徴付けられるタイプにあてはまる傾向が強く、一方、下層クラスでは「よい親」「よい子ども」と考えていた伝統的な概念（厳格に硬く考えられた役割概念）に反応することが提起されている<sup>(20)</sup>。とくにデュバルの場合、社会変動（social change） 産業化・都市化などを反映して親の役割概念が適合して変化していくという理論的立場を採っている<sup>(21)</sup>。これ

に対し、上層クラスでは社会変動をより早く察知し、新しい概念を認識できる環境にいたため、それに適合しやすいのに対し、下層クラスでは余裕の無い生活状態などにおいて相対的にそうした認識を得るための条件や機会に乏しい。よって階層間で伝統的な概念のままでいる層と、非伝統的で新しい概念を導入する層とが生じているとしている<sup>(22)</sup>。

こうした養育方法に関する階層間の異なりの解釈について、また一歩踏み込んだ提起をするのがホワイト（1957）である<sup>(23)</sup>。ホワイトはミドルクラスの親に関して、1940年代のシカゴにおける研究とその後行なわれた諸研究との矛盾点、つまり養育方法の変動から、その理由のひとつの可能性として、ブロンフェンブレナーと同様にミドルクラスがマスメディアなどを通じた専門家や育児書、教師や友人などの考えに反応しやすい点を指摘する<sup>(24)</sup>。

ところがホワイトの場合、雑誌や新聞などの一般的な読書における反応に階級差は見られず、あくまでも差の傾向が見られるのは専門家の権威や身のまわりの友人・知人の動向に関してなのである。この自分の周囲の人々ならびにある種の権威（専門家）に依存する傾向を指してホワイトは、ミドルクラスの母親がリースマンという「他者志向型」に近いと指摘するのである<sup>(25)</sup>。

さて、以上のように戦前・戦後のアメリカにおける階層と養育方法に関する調査とそれらの解釈についてここで認識しておきたいことは、戦後、いくつかの養育方法に関してミドルクラスにおいて厳格な傾向から今度はより寛容的な傾向に変化したということ、一定の養育方法については、全体として寛容的な傾向に変化したこと、戦前・戦後を通じてミドルクラスにおいて子どもの自立・自律ならびに自己責任・自己管理、また業績達成に関する強い期待の傾向が見られること、これら階層間の差異の要因に関しては、特にミドルクラスの親が専門家の意見を聞き入れること、またそうしたメディアや自分の周囲の友人・知人の傾向に敏感なことが挙げられる、ということである。

### 3) 階層と養育との関連に対する批判

しかしこのような社会階層と養育方法との差異を指摘し、論じられる研究がある一方、養育と階層との関連を疑問視する声もある。

モーア（1957）らの、ハヴィガストら（1946 / 1955）における調査と自分たちの調査とを含めた解釈<sup>(26)</sup>によれば、階層と養育方法との間に統計的に重要な差異がみられたとしても、それらは108の項目に対してわずか21の項目に関してのみ確認されるにすぎないとして、階層的差異を予期、かつ説明するには微細であるとしている<sup>(27)</sup>。また、差異を確認した項目

に関して、仮説に対して必ずしも検証的な意味をもたないため、重要な基礎的見解をみいだすのが困難であると評価する。

例えばハヴィガストの調査では、ミドルクラスでは家での手伝いを早期からさせることが期待されているが、彼らの調査では家事手伝いに関して要求しないミドルクラスの母親が多い傾向がでたのである<sup>(28)</sup>。とはいえ、これはもちろんブロンフェンブレナーが主張するように、ミドルクラスの養育方法に関するイデオロギーが変化したために彼らの調査結果がそれらの影響を受けているとも解釈できる。ここで重要なのは、こうした混沌とした調査結果から、彼らが提起する養育調査に関する方法的な問題点の指摘である。

それは第一に、そもそも子どもの養育方法における個々の実践の性質に関する価値を判断する、あるいは区分して位置づけるような基準が存在するのか、ということである<sup>(29)</sup>。例えば、ある養育実践を判断し、解釈してそれを「寛容」であると位置づけること自体、そのような判断は特定の社会における特定の価値基準に基づいた発想からきているといえる。現実には、何であれ特定の育児実践の好都合なところだけを評価しようとする試みによっては、ほとんど認識されない複雑に絡み合った基準や要因が存在するものだと指摘されている。

また第二に、寛容さなどの態度に関する、親の養育実践のすべてに一貫したテーマが存在するのかという問題である<sup>(30)</sup>。例えば、寛容な養育態度の母親といえども、子どもに対して何からなにまでも寛容な態度であるわけではない。ある部分では厳格であったりまたある面では無関心であったりするものであって、おそらく基本的・根本的テーマを親たちは有しているのかもしれないが、養育における個々の性質は多様性と変化に富んでいるものと考えるのが普通であろう。

そして第三に指摘されるのは、社会階層を養育研究の説明変数として設定することに対する重要性もしくは有益性についてである<sup>(31)</sup>。モアにおける諸調査の整理の結果に関する限り、そのような疑念が生じるのも当然といえる。階層的地位による集団の区分は、社会的経済活動などの説明変数としては圧倒的な根拠があるだろうが、少なくともこうした社会化の実践の場合には当てはまらないとしている。

以上のような階層と養育方法の研究に対する批判点は、いわゆる「変動期」における論文に限ったものではなく、これら三点とよく似た問題点を指摘しているものとしてJ・レスリー(1965)がある<sup>(32)</sup>。レスリーは、数々の先行研究における養育調査の項目を用いてミドルクラスの母親に質問調査をおこない、それらの回答に一貫した意味や傾向を読み取れるかどうかをテストしている。具体的には、子どもの性的行為に対する寛容 = 厳格傾向、 子ど

もに服従または自己信頼のいずれかを求める傾向、 母親に対する攻撃性に対する寛容 = 不寛容、についてそれぞれの複数の項目に対する答え方から、ミドルクラスの母親の態度を見出そうとした<sup>(33)</sup>。

その結果、それらの項目に対するミドルクラスの母親の態度に一貫性のある傾向は解釈されなかった。まず、性的行為の許容性に関しては、「母親が子どもに性的好奇心を持つのは悪いことである」の項目に 87.2%が寛容性を示す一方、「母親は他の子どもたちと遊ぶことにおいて性に関する興味を持たしてはいけないと子どもに教えねばならない」の項目に対しては、わずか 1.8%が寛容性を示すのみであった。つまり、これら諸項目において一定した寛容的傾向はみられないので、先行諸研究において指摘されてきたようなミドルクラスの解釈は必ずしも当てはまらないとしている。知見はむしろ、子どもの性的行為を許容しないでいかに子どもに性的許容性を伝達するかに関する混乱の存在であるという<sup>(34)</sup>。

同様に、子どもの諸活動に関して服従すること、あるいは自己信頼のいずれを重視するかという諸項目では、ミドルクラスの母親が子どもの自己信頼を認める傾向に、項目間で大きな差異があらわれたとする。ここでも、子どもの自己決定が重んじられる傾向が強いにもかかわらず、彼らが悪い決定をした場合には不寛容な傾向がみられるという<sup>(35)</sup>。

子どもの攻撃性に対する寛容性についてもまた同様で、攻撃性に関する個々の具体的な行動パターンによって母親の回答には大きな差が生じてくる。結論として、養育における寛容 = 厳格の傾向をみていくということは、複雑な変数を扱うということであり、1つや2つの項目の評価のみによって計り得るものではないとされる<sup>(36)</sup>。つまり、たとえミドルクラスの親が養育や子どもの行動に対して寛容な傾向があると解釈されても、その調査に用いられた項目内容いかんによっては、親の回答が大きく異なる可能性があるということである。いいかえれば、被説明変数の設定における「詰め甘さ」が指摘されている。

そしてさらに、説明変数の設定においても批判があげられている。1940年代においては、社会経済的地位と行為ならびに価値観のシステムとの間に、同一性を見出すことは妥当性があったが、1960年代以降ではそのような見解は適切でないという。つまり、それ以前では、社会階層とは「価値観ならびに生活方式における認識可能な差異を含んだ、比較的閉じた階級システム」であったのに対し、60年代以降では「社会階級自体の性質における重大な変化（階級層を貫く巨大なマスメディアなどの影響）」によって、社会経済的地位による区分はより意味のないものになったと指摘する<sup>(37)</sup>。つまり、先行諸研究が設定していた職業、収入、学歴による指標のみでは、包括性が不十分であるということか、もしくはもっと別の変数に

よる区分（準拠集団、宗教、地域など）の方がより適切だとされるかのいずれかということである。

このような被説明変数（養育実践における調査項目）の設定や社会階層区分の有益性に対して、やはり同じように疑問を投げかけるのがH. エランガー（1974）である<sup>(38)</sup>。彼はまず、養育法に関する先行諸調査の整理から、親の体罰の利用においては戦前戦後の時代を通じての変動がみられないこと、および体罰の利用と階層との関連はみられないということを指摘している<sup>(39)</sup>。前述したBronfenbrennerの分析によれば、子どもの罰則方法において、労働者階級の親には体罰がより多く用いられる傾向があるがミドルクラスの親においてはより子どもの心理的・内面的精神に作用するであろう方法（孤立化、説得、愛情指向的的技巧など）が用いられるとされていた<sup>(40)</sup>。エランガーは、Bronfenbrennerの分析がわずか6つの調査研究によって解釈されていたが、その後おこなわれた調査を加味して階級との格差の統計的重要性を分析した結果、階層と体罰利用との関係について異なる結論に至ったという<sup>(41)</sup>。つまり、社会階層と叩き（spaning）との関連は比較的弱く、また時代間における変動もほとんどないというのである。

それでは階級と罰則的技法（discipline technique）との間にまったく関連が見出されないのかといえばそうではなく、その罰則が行なわれる際における別の要素、例えば失敗を犯した子どもに関する特定の状況の違いや体罰自体におけるより具体的な方法に階層区分的な関連が存在するのではないかとしている<sup>(42)</sup>。このことについてエランガーでは、実際の調査に基づいて指摘されているわけではないが、M. コーン（1969）の引用から具体的な体罰の形式に関する階層的格差ではなく、体罰が行使されるとき、親の子どもに対する着眼点、つまり親が子どもの何をもってそうした体罰に及ぶかの基準が異なる可能性があると指摘した<sup>(43)</sup>。つまり、コーンによれば、ミドルクラスの親の場合では子どもの行為の直接的な結果に対してではなく、そのような行為に至った子ども自身の意図の解釈に基づいて体罰を与える傾向があり、一方、労働者クラスの親では子どもの行為による直接的な結果に基づいて罰を加える傾向があるとされる。とりまなおさず、ここでは体罰という変数の設定を巡ってそのとらえ直しが議論されている。

そうしたことを踏まえて階層という説明変数に対しても、エランガーは「階層における多様な諸側面・階層区分を通じた説明的諸変数の特徴もまた探求すべきである」といい、少なくとも単なる社会経済的地位による区分ではなく、それらの区分のうちの具体的に何がどう関連づけられるかがこれからの調査研究においては重要だと指摘する<sup>(44)</sup>。

さて、以上の三者においてみてきたように、階層と養育実践とに関する研究では、諸変数概念の再考が促されていたといえるが、事実、階層と養育方法をめぐる文献も 1970 年代を境に大きく下火になっている<sup>(45)</sup>。しかし、こうした批判に対してひとつの示唆を与えようとする試みとして考えられるのが、コーンによって 1960 年前後から始められた階層と親の子どもに対する養育の価値志向に関する一連の調査研究である。

コーンの調査研究においては、養育方法に関する指標や選択項目は、表面的具体的な行為に関するものではなく、それら全体に係る性質、価値判断をみようとするものである。また社会階層といった説明変数においても、一貫して注目されているのはそれらに位置している個人がそこから有するに至るであろう資質にポイントが置かれる。つまり、階層それ自体が個人に何を意味するかを不問にしてきた、ブラックボックスとしてきた先行研究に対して、階層的地位とそれに従属しているであろう変数とを相互関連したものとして意味づけようとしている。それはまた、逆に階層的地位の探求が被説明変数に対する仮説にもつながり得るものとなっているのである。